

第29回

小学館 ノンフィクション大賞

最終選考結果のお知らせ

大賞

『特攻服を着た少女と1825日』

比嘉健二 (ひが・けんじ)

小学館は本日、『週刊ポスト』『女性セブン』2誌主催による『第29回小学館ノンフィクション大賞』の最終選考会（午後5時から）を行い、受賞作を決定いたしました。

今回は大賞に『特攻服を着た少女と1825日』を選考しました。

大賞受賞者には賞金として300万円が贈られます。

受賞を祝う会は、社会情勢を踏まえた上で、単行本刊行に合わせて執り行う予定です。

PRESS RELEASE

2022年12月9日

第29回「小学館ノンフィクション大賞」

最終選考結果のお知らせ

主催：株式会社 小学館 週刊ポスト／女性セブン

大賞

『特攻服を着た少女と1825日』

比嘉健二（ひが・けんじ）

【梗概】

13歳で地元のレディースに入り、1年もたたずに総長として君臨し、やがて全国のヤンキー少女たちからカリスマ的な人気を誇るも、仲間からのリンチに遭い、破門されて地元を追われた少女・すえこ。親友の死を乗り越え、結成20年を誇る歴史・規模ともに日本一のレディース『三河遠州女番長連合』初代総長として地元のヤクザと渡り合い、事務所まで構えて君臨し続けた女帝・のぶこ。レディースに所属しながら執筆や音楽など多方面で才能を発揮して雑誌の連載やラジオパーソナリティーとしても活躍し、現在ではかつての自分や仲間と同じように生きづらさを抱える少女たちを支援する活動に全力を注ぐじゅんこーバブルの狂乱の一方、1980年後半～90年代前半は日本全国でヤンキー少女たちが特攻服をなびかせていた時代でもあった。偶然目にしたその姿に惹きつけられた著者は、1989年にレディース雑誌『ティーンズロード』を創刊する。特攻服を着た少女たちが一同に会する一触即発の撮影現場や、チームをまとめ上げるレディース総長たちの知られざる苦悩、薬物の中で最も有害とされるシンナー中毒をめぐる誌面討論や、いじめや摂食障害、失恋など10代の少女の切実な悩みが綴られた読者投稿.....。

“活字のマブダチ”として学校や社会からはみ出した少女たちの居場所を提供し続けた『ティーンズロード』。その初代編集長として全国を駆け回って彼女たちを取材し、向き合ってきた著者が、その熱狂を振り返りながら、現在の姿をレポートする。チーム内の上下関係は厳しく、時には鉄拳制裁も辞さない。常に警察に追われ、学校や親からも糺弾され、少年院に入るような事態も決して稀ではない。

PRESS RELEASE

2022年12月9日

にもかかわらずなぜ彼女たちはケンカや抗争に明け暮れる青春を選び、その日々を経て、どんな大人になったのか。また、なぜ、ヤンキーカルチャーが10代の少女たちから絶大な支持を得たのか。出版史からもカルチャー史からも埋もれて、語られてこなかったレディースの世界を、彼女たちと過ごした1825日の記憶とともに紐解いて行く。

| PROFILE | 比嘉健二

年齢：66歳
現住所：東京都
職業：編集者

1956年、東京都足立区生まれ。1982年にミリオン出版に入社。『S&Mスピリッツ』などの編集を経て、『ティーンズロード』『GON!』『実話ナックルズ』『漫画ナックルズ』などの雑誌を立ち上げ、後に社長に就任。現在は編集プロダクション・V1パブリッシング代表として『昭和の不思議』『臨時増刊ラヴァーズ』などを担当。

『小学館ノンフィクション大賞』 について

『小学館ノンフィクション大賞』とは？

「小学館ノンフィクション大賞」は、1993年、創刊25周年を迎えた『週刊ポスト』が『SAPIO』とともに、21世紀へ向け新しい感覚で時代を切り拓いていく新進気鋭のライターの登竜門となるべく、「21世紀国際ノンフィクション大賞」として新設、第7回より「小学館ノンフィクション大賞」と改称したものです。受賞作は『絶対音感』（第4回）、『マグロ土佐船』（第7回）、『ネグレクト』（第11回）、『小倉昌男 祈りと経営』（第22回）など、このジャンルでは異例のベストセラーとなっていることから、当賞がノンフィクションの新しい地平を拓き、新しい才能を発掘するものであることを示していると自負しております。

募集作品は未発表作品に限り、海外冒険旅行や、博物誌、観察記、歴史発掘、ビジネスドキュメント、スポーツドキュメント、科学ドキュメントなど、さまざまな視点から「時代」を捉えたものを、国内外を問わず広く世界から求めます。原稿枚数は、400字詰め原稿用紙200～300枚程度で、応募資格は、プロ、アマ、性別、国籍、年齢を問いません。

PRESS RELEASE

2022年12月9日

29回を数える今回は、本年8月末日に募集を締め切り、100を超える力作が寄せられました。この中から次の4作が、本日午後5時から小学館（東京・千代田区）で開かれた最終選考にかけられ、星野博美、白石和彌、辻村深月の各選考委員により受賞作が決定いたしました。

最終候補作

『壁を壊した男 1993年の小沢一郎』

城本勝（しろもと・まさる）

『カミカゼの亡霊』

—人間爆弾をつくった父・大田正一—

神立尚紀（こうだち・なおき）

『狩人と山神』

—野生動物・先住民・大いなるものとの対話—

黒田未来雄（くろだ・みきお）

『特攻服を着た少女と1825日』

比嘉健二（ひが・けんじ）

※タイトル五十音順

**賞金
発表**

大賞＝300万円（複数受賞の場合は分割）
受賞作は2022年12月～2023年1月頃発売の『週刊ポスト』『女性セブン』及び小社ホームページで発表いたします。受賞作は単行本として刊行予定です。

選考委員

星野博美（ノンフィクション作家）、白石和彌（映画監督）、辻村深月（小説家）

※受賞を祝う会は、社会情勢を踏まえた上で、単行本の刊行に合わせて執り行う予定です。